－所蔵作品紹介－

小畠　廣志　KOBATAKE Hiroshi

八月

はちがつ

作品データはこちら

小畠廣志（こばたけ・ひろし　1935-1996）は、洋画家の父・辰之助と、日本画家の母・鼎子(ていこ)の三男として、東京都武蔵野市吉祥寺に生まれた。東京藝術大学の彫刻科で、日本を代表する具象彫刻家の一人として知られる菊池一雄に学び、卒業後は中学校や高校で教鞭を執りながら、はじめは二科会を中心に作品を発表。1984年に二科会を退会してからは独立独歩で活動した。父・辰之助も京都で鹿子木孟郎に師事し、上京後に白馬会の黒田清輝のもとで研鑽を積んだのちは組織に属さず活動したということなので、父の気質を受け継いだと言えようか。

石膏やブロンズなどを幅広く手がけるなかで、量塊感ある抽象的造形と、具象的な人体を組み合わせた独特の木彫が高く評価されて、77年に第６回平櫛田中賞を受賞。しかしながら80年から晩年までは、自身の工房でもっぱらブロンズの制作とリトグラフの研究に励んだ。田中賞の受賞式で田中その人に木彫を続けるよう激励を受けたが、小畠はそのときすでに版画に関心を移しており、木彫をやめるつもりだったので気まずい思いをしたというエピソードも残る。

小畠は、69年には苫小牧市勇払に浅野晃の文学碑《天と海》を制作し、91年には穂別町（現・むかわ町）に、同町で発掘された首長竜をモデルとしたモニュメント《化石幻想》を制作、94年にも同町に林業をテーマとしたモニュメント《自然への門》を制作している。このように、小畠に北海道との縁があったことは興味深い。

さて本作である。制作年代から、小畠が木彫からブロンズに移行する過渡期の作例にあたることがわかる。一木造りの女性の全身像で、木材の量塊感を残しつつ、具象性の高い肉感的なフォルムを造形する作風は、小振りながらも、70年代以降の小畠の木彫作品の特徴をよく示している。本作の寄贈者である旭川在住の美術家・荒井善則氏は、東海大学の教養学部に在校中、助教授として在籍していた小畠に薫陶を受けたという。この度の寄贈により、めぐりめぐって、北海道にまたひとつ小畠の作品が増えることとなった。縁とは不思議なものである。